特別活動部会

研究主題　「特別活動における生徒による評価を生かした指導の改善」

1　はじめに

平成13、14年度の研究開発では、「評価の観点」の開発や、「評価結果を踏まえた指導の手立て」を研究開発の対象とした。

今年度は視点を変えて、「特別活動における生徒による評価を生かした指導の改善」という研究主題を設定し、生徒による教師の指導内容及び指導方法に対する評価を生かして指導の改善を図ることとした。

「特別活動」の目標は、端的に表現すれば、望ましい集団活動を通して、生徒の自主的・実践的な態度を育て、自己を生かす能力を養うことにある。このことは、特別活動は生徒の自主的な活動であり、生徒の自主性に任せて、教師はできるだけ何もしない方がよいということではない。教師の意図的・計画的な指導・援助がどのような生徒にとっても必要なことは言うまでもない。

この点を踏まえると、教師の計画した指導の目標や指導内容・方法及び評価方法が十分に生徒に理解され、指導の結果として生徒に望ましい変容を与えることができたかを知ることは、教師にとっては、よりよい教育活動の構築に欠かせない要素である。また、教師自身の指導の在り様を見直して、生徒がより充実した学校生活を送ることが出来るようにすることが、今教師に求められる大切な姿勢であるとも考えた。

以上の考えから、特別活動に「生徒による評価」を取り入れ、どのようにして指導の改善に生かせるかを研究開発することとした。

2　特別活動における生徒による評価の実際

学習指導要領に示される特別活動の内容は、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事である。本部会では、特別活動における生徒による評価の対象を下記のようにとらえた。

①ホームルーム活動 ⟶ ロング・ホームルーム等における担任教諭の指導内容・方法
②生徒会活動 ⟶ 生徒会担当教諭の指導内容・方法
③学校行事 ⟶ 文化祭や体育祭等の実行委員会担当教諭の指導内容・方法

また、評価方法については、これまで多くの学校において、学校行事等の実施後に生徒に対してアンケート調査を行い、次年度以降の実施の参考としている学校が多いと考えられるので、実施の時期と内容を工夫することで、生徒による評価の実施が容易になると考えた。

3　研究開発の内容・方法

本部会では、実践を重視し、以下の２点について、実際に生徒による評価を行って、生徒による評価の成果や課題を探ることとした。

(1)　「ホームルーム活動における進路指導の改善」
(2)　「文化祭における実行委員会指導の改善」

それぞれの内容に「生徒による評価」を取り入れて、それを分析・考察することで、生徒による評価の成果や課題を明らかにすることを今年度の研究開発の目標とした。

具体的な方策としては、毎年通常行っている生徒に対するアンケートをモデルとして、質問項目を工夫・改善して活用することとした。

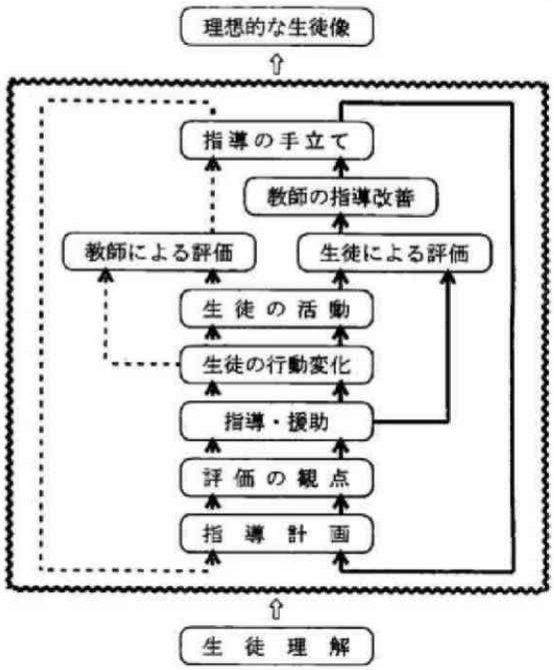
アンケート実施に当たっては、次の３点に留意した。

① 教師の指導・援助のよい点と改善すべき点が分析できるものであること。

② 次年度以降の指導のみならず、現在の指導の改善に生かせるものであること。

③ 授業評価とは異なり、生徒の評価が教師個人に対してだけではなく、委員会指導や生徒会指導を行う教員組織に対しての評価ともなりうること。

一般的な特別活動における評価と指導



→：生徒による評価を生かした指導の改善の流れ
---→：教師による評価と指導の流れ

4　研究開発の成果と課題

実践事例Ⅰでは、「ホームルーム活動」を取り上げた。ホームルーム活動の場合、評価対象が担任教諭であり、活動のねらい等が明確に生徒に伝わったかアンケート調査で確認することができた。また、生徒の様々な考え等も把握することができ、指導の改善に結び付けることができた。

実践事例Ⅱでは、「学校行事」を取り上げた。学校行事の場合、学校行事の実施方法等の改善の観点でアンケート調査がすでに多くの学校で行われているので、すでにあるアンケートに教師の指導内容・方法を評価する項目を追加すれば実施は比較的容易である。しかし、実施時期がこれまでのように行事終了後に設定してしまうと、生徒による評価の成果を学校行事に携わった生徒たちに直接的に還元することができないので、学校行事の準備期間中に実施することが望ましい。また、学校行事における実行委員会の生徒たちと教師とのかかわりは比較的多いので、日常的な生徒との語らいがそのまま生徒による評価になっている。特別活動における生徒による評価は、生徒とのコミュニケーションを補完するものであり、その実施の意義は大きい。

今後の課題としては、特別活動における生徒による評価は、通常の授業における生徒による授業評価とは異なり、評価項目の設定に当たってはより一層の工夫が必要であること、教師の視点が生徒の自主的な活動の成否に向かう傾向があるので、教師が自らの指導の在り方を生徒に問うことの大切さを理解するかどうかが挙げられる。本実践事例を参考にして、より多くの学校で生徒の声を把握し、特別活動の指導の改善・充実を図ってほしい。

5　実践事例

実践事例Ⅰ　「ホームルーム活動における進路指導の改善」

(1)　学校の特色と生徒の実態

本校の進路希望調査を見ると、生徒の進路状況は多様であり、表１のようになっている。

四年制大学・短期大学・専門学校・就職の各分野での指導・援助はもちろんのこと、その他に分類される生徒への指導・援助が大きな課題である。その他に分類された生徒のうち、進学のためのいわゆる「浪人」は極めて少数であり、就職も進学もしない、いわゆる「無業者」が大半を占めている。将来への夢や希望を抱けず、今、何を学ぶべきか、将来、何を学ばなくてはならないかを見つけ出すことができないことが原因の一つとして考えられる。

表１　分野別進路状況の経年変化　(単位：%)

年　度	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
四年制大学	8.79	8.38	13.87	15.30	13.53
短期大学	10.99	8.38	4.05	3.82	4.12
専門学校	33.52	31.29	38.73	38.80	42.35
就職	12.09	11.17	10.40	19.13	15.29
その他	34.61	40.78	32.95	22.95	24.71

(2)　生徒による評価のねらい

年間を通して進路への意識がもてるような指導を考えるとともに、人間としての在り方生き方の指導を通して、生徒がいかに生きるのか、将来どのように社会参加をするのかを自ら考え、決定できるよう指導・援助を行う。

また、生徒による評価を取り入れ、その評価を基に指導内容・方法のより一層の改善につなげていく工夫を図る。以下、生徒による評価のねらいを具体的に記す。

① 評価の観点に基づいた評価及びその結果を踏まえた指導が、生徒の実態に即しているのか。指導後に生徒に望ましい変容が見られたかを知る。

② 教師の立てた指導・評価の目標がきちんと生徒に伝わり、生徒が自ら立てた目標に向けた活動を行い、充実した学校生活を送ることができるようにする。

(3)　評価者

Ａ高（全日制・普通科）　２年　　33名

(4)　生徒による評価の取組の経過

進路指導計画を作成する取組の中で、生徒による評価を取り入れることとした。これは、多種多様な進路希望に対して、適切な情報提供や案内・説明などの指導・援助ができているかを教師が把握するためである。また、生徒も教師を評価することで、自分に必要な情報が何なのかを考え、自己を見つめ、課題を見付けることができるのではないかと考えた。

さらに、体験的な活動を行うことで、進路への具体的なイメージをもち、目標設定ができるようになると考えた。表２に進路指導年間計画を示す。この年間指導計画による生徒の活動が、(6) の「生徒による評価の取組の経過」のような一連の流れとなるよう取り組んだ。

表２　進路指導年間計画

	行　事	内　容
６月	進路説明(HR)	HRにて、これからの進路活動について指導
７月	進路体験ガイダンス※	希望分野ごとに分かれての模擬授業体験
夏季休業中	進路体験	(希望者のみ)看護・保育・介護福祉の体験実習
１１月	分野別説明	分野ごとの詳細な説明・資料収集、活動計画
３月	インターンシップガイダンス	職業を意識した体験学習
春季休業中	進路体験	(希望者のみ)看護・保育・介護福祉の体験実習
４月	進路希望調査・個人面談	昨年度の活動を参考にした、進路希望調査
６月	希望分野進路説明	具体的な活動についてのガイダンス

※　７月<進路体験ガイダンス>
　次の13分野から１分野を選択し、模擬授業に参加する。

1　大学・短大進学　2　保育系短大進学　3　専門学校自動車整備　4　ファッション関係　5　音楽関係
6　看護・医療系　7　栄養・調理系　8　理容・美容系　9　福祉関係　10　情報処理系
11　動物関係　12　スポーツ・健康　13　就職・公務員

(5)　結果と考察

本校では、進路を決定できず卒業していく生徒が非常に多い。２年生ということもあるが、６月の段階で52%がまだ進路希望を決めていない。

６月の進路説明会では、この状況を予め想定した上で、ホームルームにおいて進路の選択決定の意識付けのために説明を行った。評価は５段階で実施した。当初、３に評価が集まるのではないかと予想していたが、実際は分散した結果が得られた。生徒が適切に評価をしてくれた結果であると考える。

評価の結果、教師の話し方や内容などは概ね良好の評価が得られたが、配布した資料が見にくいとの意見が多数見られ改善の必要があることが分かった。また進路指導の次の課題も見つかった。具体的には、紙の資料や教師の話だけではイメージがわきにくく、具体的に体験をする機会が必要であることが分かった。

７月は先の進路説明会の結果を受けて、体験を目的とした授業ガイダンスを行った。この行事は複数の外部講師による模擬授業である。興味ある分野の体験を通し、多くの生徒が進路に対する興味をもち、進路に対する意識の変化が見られた。また、さらに詳細な情報を求めていることが分かった。

11月はより専門的な情報を集める機会を設定した。具体的な資料を抱え、必死に情報を収集している生徒の姿が目に付いた。今後は個別の計画表をもとに、進路決定をしていく援助が必要である。

今回、生徒による評価を実施することによって、生徒が求めている情報が何であるかを速やかに把握することができた。また、そのことによって教師がどのような指導・援助を行ったらよいかを立案できた。その結果、年間を通してより一層系統性のある進路指導が実践されていると考える。

今後の課題としては、集団と個人、進路希望決定者と未決定者、多様な希望分野など、指導・援助を行う上での視点は多種多様であること、また、生徒一人一人の個別の状況などが複雑にからみ合った中で年間を通して計画性・系統性のある指導が大切なことを念頭に置き、評価内容・方法、実施時期を工夫していく必要がある。

(6) 生徒による評価の取組の経過

評価の観点	指導・援助	生徒の活動	生徒による評価

〈6月　進路説明〉

どのような進路先があるのかを知り、自分に適した進路選択ができたか。	どのような進路先があるのか、資料提供をする。 情報収集の仕方を説明する。	配付資料・出版物・インターネット等を活用した情報収集を行なう。 自己の適性を考察する。	適切な情報が、与えられたか。 適切な指導・援助が、得られたか。

指導の改善

進路希望が定まりつつある者は、もう少し踏み込んだ情報が欲しいようであった。そこで、アンケートにより興味関心の高かった13分野について講師を招き、模擬体験授業を計画実施する。生徒は実際の体験やより具体的な情報を求めている。また、イメージのわかない生徒も、具体的な体験をすることでヒントが得られればよいと考える。

生徒の変容

具体的な進路先について相談に来るものが見られるようになった一方で、まだ進路に対するイメージがわかない生徒が多数見られた。

〈7月　進路ガイダンス〉

体験活動により、自己の選択した分野が、真に適しているか、興味を持つことができるものであるかを確認し、進路希望に役立てることができたか。	希望分野ごとに外部講師を依頼し、模擬授業・体験活動を実施する。 進路への意識を高めることができるようにする。	選択した分野の模擬授業に参加する。 活動を通して自己の適性を再考する。	適切な情報が、与えられたか。 適切な指導・援助が、得られたか。

体験活動を多く取り入れることで、進路への意識が高まることが分かった。
地域や社会教育機関等とも連携を図りながら、今後の進路指導を充実させていく。

非常に活発に活動をしていた。具体的な活動を通して興味・関心を持ち、積極的に取り組む姿勢が見て取れた。またアンケートの結果を見ても、明らかに多くの生徒が進路に対する意識をもち始めている。

→〈夏季休業中　就業体験・施設見学・体験学習〉

〈１１月　分野別説明会〉

定まった方向の詳細な情報が収集できる。 今後の活動について各自が計画を立てることができたか。	分野ごとに講師を招き、具体的な情報提供をしてもらう。 今後の計画をたてる援助を行なう。	希望分野調査資料の作成。 今後の活動予定表づくり。	適切な情報が、与えられたか。 適切な指導・援助が、得られたか。

個別の具体的な活動予定表を作成することで、教師も指導・援助をしやすくなった。
集団に対する意識付けの他、今後は個々への対応がより大切な取り組み課題である。

より具体的な情報を収集できた結果、自分の目標・課題を見つけることができた。

〈3月　インターンシップガイダンス〉 → 〈次年度の活動へ〉

実践事例Ⅱ　「文化祭における実行委員会指導の改善」

(1)　学校の特色と生徒の実態

Ｂ校は比較的落ち着いた普通科であり、部活動も盛んに行なわれている。「自由と自治」・「真理の探究」を教育目標に掲げ、生徒会活動も自治会という名称の組織で行われている。主な自治会行事は生徒大会（年２回）、体育祭、文化祭と昨年度から始めた合唱祭の４つで構成されている。体育祭、文化祭は自治会役員の招集により運営部（実行委員会）が組織され、生徒の力で運営し、教師が助言を与える形を理想として指導に当たっている。

(2)　生徒による評価のねらい

本事例では、実行委員会が全校生徒の意見を集約しながら、主体的に企画・運営を進めていくことができるような指導を考えるとともに、実行委員会の活動を通して、生徒が責任を果たし、委員相互が理解・協力できるように指導・援助を行うことを目標とした。

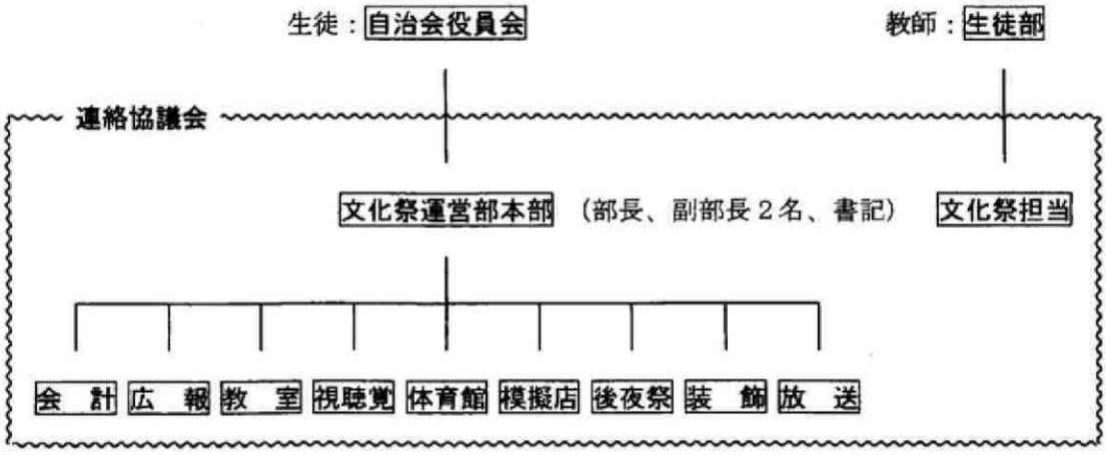
その際、生徒による評価を取り入れることによって、その状況に応じた的確な情報や指導が与えられるように指導の改善を図ることをねらいとした。以下、生徒による評価のねらいを具体的に記す。

① 連絡協議会を通じて、生徒との対話から実行委員の意見を直接吸い上げ、要望などに素早く対応し、生徒の主体性を重視した活動を支援する。

② アンケートを活用して、教師から適切な資料・情報が提供されているか、指導・助言が十分になされているかという生徒による評価を実施することで指導方法の改善に生かす。

(3)　評価者

運営部本部（部長、副部長２名、書記）と９つの班の班長・副班長からなる幹部によって組織される20名程度の生徒に評価をしてもらった。



(4)　生徒による評価の取組の経過

実行委員会を指導する上で、これまでは連絡協議会という会議を開催してきた。連絡協議会では各班の活動状況と今後の予定などが報告され、課題や問題点の提起とその議論が行われる。また、担当教師は助言や情報提供を行うという形式で進めていた。

そこで、まずこの会議の中で直接、生徒の意見・要望を探るために、生徒による評価を実施しようと考えた。さらに、例年では文化祭終了時にのみアンケートを行い、次年度の実施時期・内容などの見直しや指導体制の改善に活用するところであるが、本事例では夏季休業中にアンケート形式の生徒による評価を実施することによって、現在指導している生徒への指導の改善を行い、実行委員の生徒が主体的に問題解決ができるように努めた。

(5) 結果と考察

① 連絡協議会での対話による生徒の評価

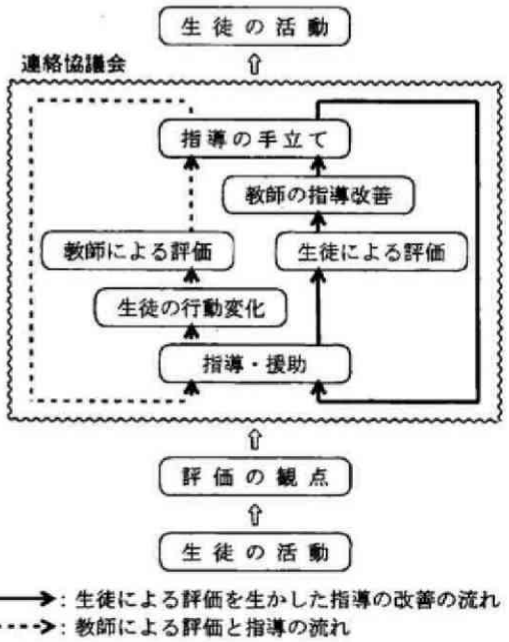
連絡協議会は平常授業時には毎週月曜日に定例で、文化祭前日からは毎日実施した。

連絡協議会での意見交換では、それまでの生徒の活動などを教師が評価をして、指導・助言を行った。

また、生徒によって、教師の情報提供や助言に対して生徒による評価（意見・要望）も行われるので、生徒の正直な意見や要望を直接得ることができる場となった。

その結果、教師は生徒部会や職員会議で必要に応じて検討し、生徒は各班で話し合ったり、ホームルームに提案するなどの活動を行った。連絡協議会では、各班の活動状況や情報を実行委員で互いに共有して進めていく関係から、生徒全員が拘束されるので、生徒の多くが「時間が長い」「効率が悪い」と感じていることが把握できた。

生徒による評価と教師による指導の流れ



② アンケート形式の生徒による評価

生徒による評価をアンケート形式（５段階で行う評価と自由記述によるものとの併用）で、夏休みに１回と文化祭終了後に１回の合わせて２回実施した。

第１回アンケートの生徒による評価の主な観点

「教師から適切な資料や情報が提供されているか」

「教師からの指導や助言が十分に行われているか」

各班の活動計画の見直しや活動上の問題点などの自己評価と同時に実施したところ、前年度からの引き継ぎがうまくいっていない点と９月からの仮設校舎への移転に対する不安が挙げられた。これは継続して実行委員を務める生徒がなく、例年とは異なる状況への教師の対応が十分でなかったことが原因と考えられる。

第２回アンケートの生徒による評価の主な観点

「文化祭の実施時期や準備日程の設定が適当であったか」

「連絡協議会の運営が適切に行われたか」

「教師からの指導・援助が十分に行われたか」

前回のアンケート同様、教師からの指導・援助については概ね十分であるという評価であった。一方「生徒の意見をもっと尊重して欲しい」という意見もあったので生徒の主体的な企画・運営を支援できるような指導の改善が必要である。実施日程や実行委員会の予算についての要望については次年度に向けての検討課題とした。また、今年度からの後夜祭の企画が成功したことを喜ぶ声が多数あった。

(6) 生徒による評価の取組の経過

評価の観点	指導・援助	生徒の活動	生徒による評価

〈４月～６月　参加要項・企画申込書の作成と配布〉

①全校生徒の要望を取り入れた参加要項を作成することができたか。 ②余裕をもった計画を立てた活動予定表を作成することができたか。 ③決定事項を各クラスに確実に伝達することができたか。	①②昨年度の担当教師・実行委員との引継を行い、これまでの問題点を把握した上で、作業を進めさせる。 ③１年生の各クラスに企画の資料を配布し、積極的な参加を促す。	①基本方針を決定し、スローガンを公募。昨年の反省に基づき参加要項を作成。 ②各班の仕事内容を理解し、文化祭当日までの予定表と班内連絡表を作成。 ③中央委員会で参加要項を配布し、生徒大会で全校生徒に要項の説明を実施。特に１年生は幹部がＬＨＲで説明。	【連絡協議会より】 実行委員としての仕事の流れを理解させるために、教員は助言を与えているか。 仮設校舎の関係でグランド施設が十分に活用できない状況の中で、教員は後夜祭の企画のヒントや助言を与えているか。

指導の改善

班ごとにきめ細やかな指導を行うために、各班に１人の担当教師を当て、活動のときの窓口として対応をする。
後夜祭の企画のヒントや運営方法の助言を与える等の情報提供を行う。

生徒の変容

各班や全体の仕事の流れを少しずつ理解し、行動計画を作成することができた。しかし、仮設校舎の教室や仮グランドでの後夜祭など経験のない部分についてはイメージができていない。

〈７月　企画内容の調整・決定と予算の配付、当日のタイムテーブルの作成〉

①基本方針に沿って企画の調整・決定をすることができたか。 ②企画内容から各団体に公正に予算を配付することができたか。 ③各団体の希望を考慮して、タイムテーブルを作成することができたか。	①公平な目で決定できるように十分企画書を検討させる。 ②昨年度の会計報告を参考に配付金額を算出させる。 ③２日間の日程のバランスを考えるとともに、参加団体や係分担との生徒の重複を確認させる。	①不十分な企画書は説明の後差し戻し、企画内容の調整・検討を行い、必要に応じて抽選にて決定。 ②企画内容に応じて補助金を配付。 ③事前に原案を提出し、職員会議や各団体の意見を聞きながら調整を行い、決定。	【アンケートより】 昨年度の資料や次年度の資料保存について、教員は指導・助言を与えているか。 仮設校舎に関連する施設の情報を、教員は生徒に十分説明しているか。

昨年度の資料に未整理な部分や欠落があるために活用できない点があるので、次年度のための活動記録の作成の改善を徹底させる。
仮設校舎に関する情報の提供と施設利用面での生徒の要望について事務室と調整を行なう。普通教室に仕切用のカーテンレールを設置するなどの改善できる課題については早急に対応し、各班の活動計画の修正を行なう。

開催時のイメージをもてるようになり、具体的な企画に対して、施設面の要望が出せるようになった。
各自の気持ちに多少の余裕ができ、次年度のための資料も各班の作業と並行して作り始めた。

〈９月　文化祭〉

①自らの役割を果たし、責任をもって、運営を遂行することができたか。 ②リーダーシップを発揮し、準備・後片付け等を生徒を統率しながら円滑に行うことができたか。	①本部との連絡体制を確立し、様々な状況に対応できる準備を行わせる。 ②準備から後片付けまでの班ごとの分担を見直し、各自の役割を確認させる。	①②「詳細な時程表」や「準備から後片付けまでの生徒への注意事項」を作成し、生徒への連絡を徹底。 在校生・来校者の様子や天候等の状況を本部で把握し、対応。	【アンケートより】 連絡協議会の運営方法で教員に要望すること。 実施時期や施設等に関して教員に要望すること。 後夜祭について、教員に要望すること。

連絡協議会について、時間を効率的にという意見が多く出されたので運営方法の改善が必要である。
引き継ぎや運営部の招集、文化祭の実施時期等次年度に向けて調整を行う。
生徒の主体性を尊重し、アドバイスの与え方に配慮が必要である。

主体的な行動や発言が多く見られ、活動に対する責任感と積極性が感じられるようになった。
無事行事を終了させることができて、多くの生徒が達成感を得られた。

〈次年度の活動へ〉